バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 147 号　〔2017 年 5 月〕

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 147 号をお送りします。今月はルカ福音書 7 章に入り、1 節から 10 節にある『百人隊長のしもべをいやす』から学びました。

ローマの軍事力の強さは統率者の組織力と指導力によるものだったが、もうひとつ、統率者同志の競争も大きな要因だった。農民あがりの兵士が腰抜けだったり、見張り中に居眠りでもしようものならその隊長が別の隊長に告訴され罰せられる。時には死刑に処されることもある。完全なピラミッド型組織の中では決して高くない位置にある百人隊長とはストレスの強いポジションだったが、この記事に出てくる隊長にはそんな荒々しさは感じられず、愛情深さと真の神への強い信仰が描かれている。

平行個所であるマタイ 8 章によると、部下は中風（脳卒中による麻痺）だとある。麻痺で死にかかるとは少し不思議な気もするが、食事もできない状態だったか、あるいは人の世話に頼って生きるだけになった自分を憂いて鬱状態になり、今にも自殺してしまうような状況にあったのかもしれない。他の隊長ならそんな部下はあっさり見捨てただろうが、この隊長はそんな彼のそばを離れることができず、介抱しながら何とかして助けようと焦っていた。そこへ、カファルナウムに主イエスが戻ってこられたとの情報が届く。イエスの神としての力を信じていた隊長には、一筋の光だった。

「主に助けていただきたい」と強く願うものの、隊長は自分がユダヤ人ではなく、ローマ人であることから躊躇した。主イエスはユダヤ人の救いのために来られたはずの方だ。汚れた異邦人という立場の自分が願い出られる余地はない。（7 節） しかし、彼はユダヤの神を心から信じており、以前には、ローマ人に対して反抗心の強いユダヤ人のために、彼らの為のシナゴーグを建てられるよう尽力した。そして礼拝には恐らくいつも隅の方で参列していた。イスラエルを支配するローマ人とは言え、彼らを異邦人として軽蔑していたユダヤの長老たちでも、この隊長には一目置いていたし感謝していた。

こうした事情からみて、部下のいやしを主イエスに願い出ることを躊躇している百人隊長に代わって、ユダヤの長老たちがむしろ自ら主のもとへ請願しに行ったのではないだろうかという気もする。隊長は主のもとへと馳せていく長老たちを見送りながら、「イエス様が来てくださったら助かる」と救われる思いだっただろう。しかし途中で考えが変わった。彼には彼を隊長として重んじ、その言葉をすぐに実行する兵士たちがいる。隊長自身も上層部の権威の下にあり、彼らの言葉を必ず実行する。ならば、神の権威の下にある主イエスの言葉は間違いなく実現するはずだ。主イエスに来ていただかなくていい、主イエスがお語りになるみ言葉には力がある。そういう信仰に変わった。そして友人を使者にたて、主イエスにそのことを伝えさせた。

「主よ、ご足労には及びません。（中略）ひと言おっしゃってください。そして、私の僕をいやしてください。」

主イエスはこの伝言を聞いて感心し、百人隊長について「イスラエル（ユダヤ人）の中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」と言われた。それは、百人隊長の日頃の信仰者としての態度が見えたからでも、シナゴーグ建立に際して尽力したことについて言及しているのでもない。彼の、神の権威をもつみ言葉を信じる信仰を受け取られたからだった。

私たちもみな、このみ言葉の前に立たされている。毎週礼拝に行き、できるだけの献金をささげていればそれでよしと安心しきっている自分はいないだろうか。そうではなく、み言葉はその通りになると信じる信仰があなたにあるかと問われている。そして、私たちの信仰を育み、私たちの目を開いてくださる神が、きっと私たちをそのように成長させてくださる。